

第 1 回世田谷区総合教育会議

日：令和 2 年 7 月 31 日（金）

場所：世田谷区民会館ホール

午後 2 時30分開会

○司会 それでは、これより令和 2 年度第 1 回世田谷区総合教育会議を開催いたします。私は本日の進行を担当いたします政策経営部政策企画課長の松本と申します。どうぞよろしくお願いたします。

開催に先立ちまして、保坂区長より御挨拶申し上げます。区長、よろしくお願いたします。

(スクリーン使用)

○保坂区長 皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂展人でございます。

本来なら、ここ世田谷区民会館ホールは定員1200人なので、かなり大勢の教職員の方、保護者の方、この総合教育会議は、年に1回はかなり大勢集まって、教育委員の皆様と私でこれからの教育はどうあるべきかを語ってきました。御案内の新型コロナウイルス感染症がなかなか感染拡大の勢いが止まっていなくて、残念ながら、今回、直接皆様にお話をするのではなくて、映像による収録という形にさせていただきます。

この総合教育会議なんですが、法律で決まっております、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の中で、自治体の首長、市町村長、つまり私が主催をして、教育委員の皆さんの御意見、そして教育に携わる多くの方の意見を集合して、世田谷区の教育としての大きな道筋を描いていくという趣旨のものでございます。

これまで教育委員会主催の教育推進会議と連続して開催をしまして、ボリュームをつくってきたわけです。壇上におけるシンポジウム、プラス、ワークショップという形でやってみたり、様々やってまいりました。ちょっとこれまでの流れを振り返ってみたいと思います。

平成29年度は、第1回は「幼児期からの豊かな「遊びと学び」の環境づくり」、そして「「学びの質的転換」と「新教育センターの役割」、第2回が「「配慮を要する子どもたち」と「学びの多様性」、「子どもの可能性を伸ばす学校外の教育環境」という4テーマでやりました。

実は文部科学省が改訂した学習指導要領でも、主体的で対話的な深い学びということがうたわれていて、いわば学び、学習する、これが大きく、もう1回位置づけをし直す時期に入ってきているのではないかということ語り合いました。

学びの質的転換、つまり質的転換なので、記憶中心、あるいは覚えたことをテストで検証してということだけではなくて、むしろ内側から湧き出してくる様々なアイデアや着想

を具現化していく、あるいは試行錯誤して、失敗してもそこから学んでいく。自分1人じゃなくてチームで事を行っていく様々な学びのあり方は、これから大きく変わっていくはずだと。そのことを新教育センターでしっかりリードしていこうと、こんな流れだったかと思います。

そして平成30年度は、第1回は「学びの質の転換と新学習指導要領」、第2回は「SDGs（持続的な開発目標）」、1回目は先ほど触れたとおり、2回目は、SDGsの授業を高校で実際に展開されている先生に来ていただいてミニ授業をし、ワークショップもやると、こんな展開でした。

そして昨年、令和元年度は、第1回が「子どもの自己肯定感をはぐくむ」、これはやはり子どもたちが、世界中を比較した若者の自己評価のデータでも、なかなか自分に対する評価がそう高なくて、未来に対するはつらつたる希望、あるいは意欲、そういうところが少し日本の若者が、あるいは子どもたちに不足があるんじゃないかと、自己肯定感をどうやってはぐくめるのかというお話、そして第2回が、今日と連続していきます。経済産業省のサービス政策課長でありながら教育産業室長を兼務している浅野大介さんに来ていただいて、『「未来の教室」に向けて』ということで、GIGAスクール構想、今日も出てくると思います。1人1台のパソコンの端末ということをこれからやっていきますと。それに向けて世田谷区がどういうふうに変わっていけるのかというようなことを問題提起を受け、話し合いました。

そして、今日のテーマが「新型コロナウイルス感染症に対応した新たな学び」、新型コロナというのは大変厄介なウイルスでありまして、なかなかしぶとい、そして、これに対する向き合い方も、私たちは試行錯誤の連続でした。子どもたちにとっては、3月、急に学校がお休みになり、春休みを挟んで4月も5月も学校臨時休業が続いたわけでございます。

そういった中で、教育委員会のほうでも、かなり急いで、いわばネット配信のYouTube動画を立ち上げて頑張ったり、あるいはインタラクティブな、相互にやりとりのできる教育ツールを使って授業をできるようにする。それが実際に具現化されたのは4月の終わりから5月にかけてだったというふうに聞いていますけれども、今、また感染のほう少し広がっていく時期で、これからの学校の中で、ひょっとしたら少し家庭の中での時間、学習に重きを置くような、そういった展開になるかもしれない。しかしながら、パソコンが、これは具体的にはタブレット端末ですが、1人1台、世田谷区の4万8000人の小中学生に、学校でのみならず、家庭でもこれが使えろという環境が今年度には出来上がると、11月く

らいから配付が始まると聞いているので、まさに今日の議論、つまりそれを使って何ができるんだと、教育がどう変わるんだと。あるいは1年生から中学3年生まで4万8000人がどのような学びの改革、進展が可能なのか、その準備はどうか。こんな本当にせっぱ詰まった大変保護者の方の関心、子どもたちの関心も高いテーマを掘り下げていきたいと思います。

今日はよろしくお願ひいたします。

○司会 ありがとうございます。

ここで、本日の会議に参加されている教育委員会の皆様を御紹介させていただきます。
渡部教育長です。

○渡部教育長 よろしくお願ひします。

○司会 澁澤委員です。

○澁澤委員 よろしくお願ひします。

○司会 中村委員です。

○中村委員 よろしくお願ひいたします。

○司会 宮田委員です。

○宮田委員 よろしくお願ひいたします。

○司会 亀田委員です。

○亀田委員 よろしくお願ひいたします。

○司会 参加者の皆様、よろしくお願ひいたします。

ここで、教育委員会を代表しまして、渡部教育長より一言御挨拶をいただきたいと思ひます。渡部教育長、よろしくお願ひいたします。

○渡部教育長 皆さん、こんにちは。教育長の渡部でございます。

新型コロナウイルス感染症による約3か月間の学校休校は、子どもたちにとって今までにない経験で、大変な時期を過ごすことになったことと思ひます。学校に行けない、友達に会えない、学校で勉強ができないなどと、今まで当たり前だと思ひていたことができなくなったことは、子どもに大きな影響を与えたことと思ひます。

教職員にとっても初めての経験で、突然始まったことで、何の準備もなく、戸惑うことが多かったことと思ひます。それでも動画を作成したり、オンライン学習を手探りで作成したり、試行錯誤しながら始めました。今日は2人の先生方に、そのときに作成した動画等を見せていただきながら、お話をさせていただきたいと思ひています。また、このような

ときには、地域の方や様々な方々からたくさん支援をいただき、大変ありがたく思いました。

このように、できることから始めてきましたが、決して十分ではなく、子どもたちや保護者の皆様には負担をかけることになってしまったことは大変申し訳なく思っています。

世田谷区では、今まではBYODから始めていました。BYODとはBring Your Own Deviceのことで、家から端末を持ってきてもらい、それを学習に使用しようとする考え方を基に進めようとしていました。ところが、このような状況になったので、文部科学省のGIGAスクール構想が前倒しとなりました。そこで、この準備を今進めているところです。

今、ICTを活用した教育へと大きな転換の時期に来ています。世田谷の教育も大きく変えていく必要があると思っています。今日は、ICTを活用した世田谷区の教育のあり方について議論をしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

教育委員の皆様には、後ほど意見交換のところでいろいろとお話をお伺いしたいと思います。

それでは、本日の会議の流れについて御説明させていただきます。

今日は、「新型コロナウイルス感染症に対応した新たな学び」をテーマに、1つ目が「ICTの活用によってこれからの世田谷の教育はどうあるべきか」、2つ目は「これからのwithコロナ、afterコロナの時代における教育や社会のあり方について」、この2点を中心に議論をしていきたいと思っております。

まずは、学校休業期間中や再開後の教育現場での対応について、教育委員会事務局統括指導主事と学校教員より説明をいただき、この間の教育現場での取組を振り返ります。その後、区長と教育委員会の皆さんとで意見交換を行った後に、最後に、区長より総括を行っていただく予定です。

本日、このコロナ禍でもございますので、マスクをつけて進行させていただきたいと思っておりますので、御了承いただきたいと思います。

それでは早速ですが、説明に移りたいと思います。

まず、新型コロナウイルス感染症がもたらした影響に対して、教育委員会ではどのような取組を行ったのか、教育委員会事務局の井元統括指導主事より説明をお願いいたします。

○井元統括指導主事 まず、4月の初めには、これまでに学校になじみがあって、すぐに

始められる取組から始めてまいりました。

こちらスライドの左側の「せたがやタイム」とは、子どもたちが教科書やプリントのアナログの学習とeラーニングなどのデジタルの学習を組み合わせ、計画的に家庭学習を進められるようにするための時間割です。各学校は、教育委員会が作成した例を基にして家庭学習の時間割を作成し、ホームページで各家庭に向けて配信いたしました。

右側の「ドリルパーク」とは、中学校の国語などの主要5教科のeラーニングを行うためのアプリのことです。漢字や計算、英文法などの基礎学力を養う問題と、文章問題などの応用力を養う問題が収録されています。臨時休業前から中学生が取り組んでいたもので、こちらを十分に活用するよう呼びかけてまいりました。

次に、4月の中旬からYouTubeを活用して学び動画の配信を開始いたしました。

左側の「せたがやまなびチャンネル」を配信した時期は、まだ外に出ることもままならない状況で、教育委員会が自宅にいる子どもたちに向けて楽しみながら学べるようにと配信いたしました。漢字や計算、体操、料理などの幅広いジャンルの動画を短期間のうちに配信できたのは、保護者や区民、区内の大学、そのほか多くの皆様に御協力いただいたおかげです。

右側の「せたがやスタディTV」は、新年度の学習を進めることを目的として、国語や算数・数学などの教科書の内容に即して子どもたちが学べるようにした動画です。自分で学習を進められるように、1つの学習内容につき教科書の内容を説明して、その取り組み方を教える動画と課題の解説や正解を教える動画の2本を配信いたしました。

この動画配信をきっかけにして、各学校でも新年度の学習内容を学ぶ動画を独自に配信するようになっていきました。

そして、5月以降の取組としましては、オンラインで双方向型の学習をできるようにしました。

左側のロイロノートスクールは、先生と子どもたちがオンラインでテキストや音声、画像などのやりとりができるアプリです。これを使って、朝の健康観察をしたり、英語で書いた自己紹介カードを交換したり、子どもたちが作った図工の作品を鑑賞し合ったりなどいたしました。

右側のZoomは、御承知のとおり、先生と子どもがリアルタイムでつながることができるオンライン会議システムです。これを使って、朝の会をしたり、クラスで自己紹介をしたり、健康状態や生活の様子を確認したりいたしました。

このように、ICTを活用した新たな学びを進めてまいりましたが、子どもたちの将来のことを考えると、さらに発展させることがとても重要だと考えております。

そこで現在、文部科学省のGIGAスクール構想補助事業を活用して、子どもたちに1人1台の情報端末と教室のネットワーク環境を整備して、学校でも家庭でもICTを使えるように準備を進めているところでございます。7月28日の入札結果により、タブレット端末を順次、11月末から2月末にかけて各学校に配付する予定です。

子どもたちにより質の高い学びを提供するとともに、新型コロナウイルス感染症拡大の第2波、第3波に備えるために、ICTのさらなる積極活用に取り組んでまいります。

以上で教育委員会の取組の報告を終わります。御清聴ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。

続いて、今般の新型コロナウイルス感染症により、今までの学習環境や生活様式が大きく変わった中、ロイロノートやYouTube等のオンライン学習を積極的に取り入れた桜丘中学校の教員である太田教諭と長田教諭より御説明をお願いいたします。

○太田教諭 桜丘中学校の太田と申します。本日はよろしく願いいたします。

私のほうからは、ロイロノートについて説明させていただきます。これから、新型コロナウイルス感染症による第2波やGIGAスクール、1人1台のことを考えてお聞きいただければと思います。

本日の私からの話の流れについては、まず、桜丘中学校がどのような学校体制であったか、臨時休業中のロイロノートの活用例と現在の活用例、そのほかロイロノートの利点とまとめについてお話しさせていただきます。

まず、本校の臨時休業中の学校体制は、全教員を以下の3つのグループに分けました。ワークシート等の課題配布、ロイロノートとYouTubeになります。分かりやすく説明すると、このような形です。私はロイロノート部門を担当し、ほかの先生方と情報共有と実行を行いました。

では続いて、臨時休業中のロイロノートの活用例を3つほど御紹介させていただきます。

まず1つ目が、学級把握のための活用です。私は1年生の担任だったため、まだ子どもたちの顔すら分からない状況で課題配布などを行っていたんですけれども、ロイロノートのおかげで、この子はこういう子なんだというふうなものが分かりました。子どもたちに送ったのは、このようなスライドです。

続いて、2つ目の活用なんですけれども、学活としての活用です。生活リズムがコロナ

の影響で、子どもたちが心配になりましたので、8時50分から9時30分、いつもの朝から1時間目の時間の中で、このようなことを行いました。

子どもたちに送ったスライドは、このようなものです。私の例をつけることで、子どもたちも、この先生が私の担任なんだというふうに印象づけることができました。

そして3つ目、もちろん学習支援のほうもロイロノートで行いました。スライドやサイト、資料などを子どもたちに送ることで、子どもたちもコロナの中、勉強を続けることができました。今書いてあるように、英語、社会、技術、ほかにもたくさんありますが、全教科の先生に協力をいただいて行うことができました。

そして、現在のロイロノートの活用例なんですけれども、授業での活用はもちろんなのですが、個別の支援もロイロノートで行っております。

本校では、登校が困難な生徒がロイロノートでやりとりをした場合、出席扱いにしております。このように個別の支援がすごく充実させるようにできます。

これが学習課題のほうの使用例です。

では、私のほうからロイロノートの利点について、2つほどお伝えさせていただきます。

まず1つ目が、個別のやりとりかなと思っております。こちらが実際に来た生徒との個別のやりとりなんですけれども、このように子どもとのやりとりをした後、全員の生徒に送ったり、また違う先生がその子に送ったりと、個別のやりとりがすごく充実しています。

また、こちらは保護者のほうから来たスライドなんですけれども、保護者の方がこうやって文面に起こして相談をしてくることで、ほかの先生と情報共有をしたり、私も1度持ち帰ってじっくり考えたりと、すごく活用ができております。

そして2つ目は、操作がすごく簡単なことだと思っております。こちらが基本的なスライドのスクリーンなんですけれども、左のアイコンで全て事足りているので、すごく操作が楽です。

そして、こちらが私が実際に英語の授業で行ったワークシートなんですけれども、答え合わせのときに、その場で写真を撮って、その場で子どもたちに見せながらやるということもできますので、すごく簡単です。

では、まとめになりますが、本校でロイロノートを使用していることは、まずは授業内での活用、また不登校生徒や欠席者への対応、生徒対応、保護者対応、教員間での資料や情報共有を行っております。また、明日から夏季休業に入りますので、本校で行っていくことは、教科指導はもちろんですが、道徳や学活も、この夏休み中に行っていく

いなど考えております。また、部活でも活用ができると考えております。

私からは以上になります。御清聴ありがとうございました。(拍手)

○長田教諭 桜丘中学校の長田と申します。よろしくお願いします。

今回の感染症予防のための休校の期間中に、桜丘中学校では、YouTubeを家庭学習のサポートに活用することに学校全体で取り組みました。今日はそのお話をさせていただきます。よろしくお願いします。

今日は、この流れでお話しをさせていただきたいと思います。

では、まず僕自身はICTの活用を、ふだんの授業の時間にパワーポイントを映すなどして活用しています。そのほかにも、生徒がタブレットを使って授業を行うということも積極的に行ってきました。

この下のほうの写真は、3Dプリンターを活用した血液循環の授業の様子です。ちょっと動画を見ていただければと思います。

(動画)

○長田教諭 こういう授業をしていたので、今回の休業中も、どうにかICTを活用して、子どもたちのために学習支援ができないかということを考えて、YouTubeの授業をつくらせていただきました。

私が授業をつくる上で気をつけたこと、意識したことを幾つかお話しさせていただきたいと思います。

まず、教室を飛び出して、実物で動画をつくるということを意識しました。最近では、オンライン授業とか映像授業というのがネット上にあふれていて、子どもたちはもう既にそういう動画は見ている。だから、そういう動画ではないちょっと変わった独自のものをつくりたいと思って、教室で授業をするのではなく、実物ですということを意識しました。ちょっと一部を見ていただきたいと思います。

(動画)

○長田教諭 ということで、教室の外へ出て実物を使うという授業を意識しました。

2つ目は、授業の中での説明の部分を可視化して、分かりやすくするということを意識しました。

(動画)

○長田教諭 僕はあまりトークが上手なほうではないので、ふだんの授業よりも、こういうふうに見える化した形にしたほうが正確に伝えたいことが伝わるということが今回の動

画をつくって分かりました。

そのほかですが、上2つは、今、紹介した2つです。

3つ目の動画の時間ですが、僕自身も経験があるんですけども、動画は見ていると飽きてしまって、そのまま寝落ちしてしまうということもあるぐらい、見るためには集中力が必要になってきます。なので、人間の集中力が続く時間よりも少し短めの8分間を目標に動画をつくっていきました。

効果音やBGMでメリハリをつけるために、まずYouTubeの動画をつくろうとなったときに、僕は生徒たちが見ているYouTuberの動画を見ました。そこで使われている効果音やBGMなどを調べて、それを活用することによって、ふだん生徒が見ているものの潜在意識というか、そこを動画の中で刺激できるように、ちょっと工夫をしました。

その動画の生徒の反応をお話しさせていただきたいと思います。

まず、理科が苦手な生徒も課題に熱心に取り組んだ。これは課題を提出してもらったときに、その仕上がり度合いを見て、ああ、一生懸命やったんだなというふうに感じました。あとは、不登校の生徒も課題に取り組んだ。今までは、配付はするんですけども提出はしてこないという子も課題に取り組みました。言葉で伝えるよりも、確実に伝わった。これはテストの結果を見たときに、普通に授業したところよりも動画でつくった授業の範囲のほうが点数が高かったので、動画のほうが伝わったんだなというふうに思いました。今まで教室に入れなかった生徒が授業へ参加するというきっかけになったということなんです。場面緘黙の生徒がいて、授業どころか教室に今までずっと入れなかったんですが、このYouTube動画を見て、趣味である動画編集をきっかけに、どういうふうに動画をつくるんですかというコンタクトを取っていくうちに、僕の授業に参加してくれるようになって、そこからどんどん出られる授業が増えていって、その子にとっては大きな変化になったのかなと思いました。

今後のYouTubeの活用方法ですが、今考えているのが、これは生徒からももらった意見なんですけれども、単元のまとめの替え歌をつくって、PVをつくってほしいということをおっしゃったので、ちょっと夏休みの時間を使ってやってみたいなと思っています。あとはテスト対策やテストの解説の動画をつくってほしいということもあったので、テスト対策の補習やテストの解説は、必要なところを必要な分だけ見ることができるので、使えるかなと思いました。あとは夏休みの補習も、おうちの予定とかがあって、その日に来られない子に対して、動画でその子の都合に合わせていつでも見られるようなシステムを

使って、勉強をどんどん進めてもらいたいなと思っています。これらを生かして行って、YouTubeの可能性をもっと広げていきたいと思っています。

御清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 太田教諭、長田教諭、具体の活用例を分かりやすく御紹介いただきまして、ありがとうございました。

それでは、これより意見交換に移りたいと思います。

説明にありましたとおり、3月2日から始まった学校休業によって子どもたちの生活は急変しました。まずテーマに入ります前に、区長にお伺いしますが、自治体の長としまして、この教育現場の事態をどう捉え、予算面や福祉との連携など、区全体の政策との調整について、何を重視して取り組んでこられたかお伺いします。

○保坂区長 学校が平常に開いているときには全く見えなかったものが、今回の学校休業で見えてきたかと思います。これは保護者の方からも多数メールもいただいているし、生の声もいただいているんですが、あるのが当たり前だと思っていた学校が急に休業になった途端、何とも言えない寂しさと、そして学校につながっているということが当たり前だったことが、どこかつながりをつかもうにもつかみ切れないもどかしさ、こういうことを感じたというようなお声が多かったですね。

多分、子どもたちも、学校が急に休みになった、その瞬間はうれしいかもしれないんですけども、ただ、3月という時期でしたので、間もなく最終学年ではクラスメートとのお別れの瞬間が迫ってくると。そして新学期、小学6年生は中学1年になる、高校に進学する中学3年生は最後の中学の最後の1か月が突然立ち切れるという、そういう意味では、子どもにとっても、どう捉えたらいいんだろうというような場面だったと思います。

そんなときに教育長と私が話したのは、やはりコミュニケーション、学校の先生方等との生徒さん、あるいは保護者の方とのコミュニケーション、つながりというのは何らかの形で継続できる、そしてまた、連絡のやりとりがあるということができないだろうか。その中で、当然、このICTを使って、今やっていただきましたロイロノートやYouTubeでつながりを回復できないだろうか。そこができる前に、電話でのやりとりも可能なんじゃないかというような話をしたんですが、いろいろ今回の事態で分かってきたのは、実は各学校には、電話回線は大変限られた回線数しかないということだったんです。具体的には2回線と聞きましたので、そうすると、2回線では、場合によっては小学校で1000人近い学校がありますから、各担任の先生がそれぞれかけていくなんてことは不可能ですよ。

また、担任の先生のお持ちの個人のスマートフォンとか携帯電話でかけるということは可能なんだろうが、それはしかし、学校運営上、規則上、そこはやってはいけないというルールもあったというふうに聞いています。先生方も、ちょっとイライラ、大変手が届かないもどかしさを感じていたのではないかなということも想像しました。そこで、連絡の問題については、一定期間、携帯電話をリースする、これを認めましょうと、そのお金を区のほうで用立てて、連絡をしてもらうというようなことをやりました。

またYouTube配信、こういったことに入っていくときに、家庭でインターネットに接続することも当たり前だよという、この環境が多いかもしれないんですが、家庭によっては、パソコン等ありませんよということも想像できたわけなので、タブレット端末なり通信環境を、区のほうで誰もが平等に、学校からの配信を受け取れる、あるいは何かを返すことがロイノート等でできるようにするということでの予算計上、そういうことをやりました。

そして、つい最近で言えば、文部科学省がG I G Aスクール構想で1人1台、これについて、世田谷区は小中学生の数で言うと大変多いので、約28億円という大きな予算がかかり、区の財政も、コロナウイルスの直撃で先の見通しが大変厳しいということもあるんですけども、まず次代を担う子どもたちの世代に、特に教育環境の整備にしっかり基盤をつくろうということで、これは議会に通していただきました。そのことで、G I G Aスクール構想で手を挙げる自治体の中では、世田谷区は早いほうだったというふうに聞いています。

専ら教育の内容については、教育委員会、そして学校の現場の先生方、校長先生を中心につくりながら、区の役割というのは、その先生方や学校長、そして教育委員会が仕事ができる物的な予算ということも含めて、土台を支えていくという役割だと思っています。そこを自覚しながら、かなり教育長とも、今の学校の様子はどうなっているんですか、こういう声は届いていますかということ、随分具体的に、週に何度かお話ししたなど、こんなことを振り返って思います。

○司会 ありがとうございます。

では、初めのテーマであります「ICTの活用によってこれからの世田谷の教育はどうあるべきか」の議論を進めていきたいと思えます。

再度、区長にお伺いします。休業期間が長期化する中で、区では文部科学省の、今もお話しがありましたG I G Aスクール構想に基づき、タブレット型情報端末の購入と各学校

内の通信ネットワーク環境の整備に取り組むこととし、補正予算を計上して児童生徒1人1台の端末配備を進めることになりました。多大な経費を要することになりますが、こうした新たな学習環境は、子どもたち一人一人に個別最適化された学習機会の提供や情報活用力の育成が図られることになります。区長は、世田谷区の教育現場のこうした改革に何を期待するかお伺いします。

○保坂区長 これは今日のテーマだと思うんですけども、この総合教育会議で一貫して、さっき冒頭御挨拶で触れたように、学びの質を転換することであるとか、主体的で対話的な深い学びとは何かとか、どうやって教育の大きな質的転換を図るのかと、こういった議論をしてきました。

実はICT、つまり学校から家庭をつなぐインターネット配信なども含め、あるいは学校で端末を使うことも含めて、私はGIGAスクールの環境が整うことで、世田谷区の一一人一人の児童生徒にとって、自分の学び、育ちにふさわしい学び方、総合的教育のあり方というのが探れるいい機会になるんじゃないかなというふうに考えています。

ただ、一人一人に1台ずつという環境は素晴らしいことではありますが、それで終わりではなくて、多分、そこから始まるんだろうと思うんですね。今も2人の先生方からの学校休業期間中の振り返りの報告がありましたけれども、きっと動画を見る時間、例えば5分だとすれば、5分の動画をつくるのに、5分では多分つくれないわけですよ。その5倍、10倍の時間がかかると思います。

ですから、ICTの端末が一人一人に届くというところで、学校の先生方やその先生方を支える教育委員会の仕組みや、あるいは場合によれば、世田谷区は大手からベンチャーまで、ICT関係の実務に携わる、あるいは研究開発をしている、あるいは新しい海外の技術について非常に詳しいとか、そういった仕事をされている方が多数いらっしゃいます。多分、クラスの中で何人もそういう保護者の方がいるという状況だと思うんですね。

そうすると、やはり1人1台の端末が手渡される、あとは学校によろしくお願ひしますと言うだけではなくて、やはりこれを使いこなしていくとか、その中の無限の可能性、ここをそれぞれの個性、また工夫によって、こんなことができるんだ、そして、こんな使い方があるんだと、子ども自身が毎日いろいろ気づきながらつくり上げていくような、そういう使い方、使われ方というのを期待したいところなんですね。

やはり大事なのは、学校の先生方や教育委員会に期待したいのはもちろんですが、それはかなり大変なことだろうと想像しています。大変なことだろうと思うからこそ、こうい

う会議で、テーマをあらかじめ明らかにして、どんな支援が必要なのか、区としては何をすればいいのか、保護者の方には何をしてもらうのが一番いいのか、このことを議論できたらと思っています。

○司会 ありがとうございます。

それでは、教育委員の皆様にもお伺いしたいと思います。

まず初めに、亀田委員へお伺いします。亀田委員は、文部科学省に在職中に教育政策を立てた経験もあり、また子どもたちの特別支援教育について造詣が深いと伺っております。これまでの経験も踏まえまして、ICTの活用によって、これからの世田谷の教育はどうあるべきかお伺いします。

○亀田委員 ありがとうございます。亀田でございます。

私からは、ICTの活用の意義について考えるところを述べた後、1つ、今日は御提案したいと思います。

この間、各学校の先生方におかれては厳しい状況の中で様々な工夫いただいたこと、そして何より保護者の方々には御理解いただいたことに感謝申し上げたいと思います。

まず、先ほどの事例を拝見して思ったところですが、お子さんたちがきっと楽しく学ぶことができるんだろうなと思いました。先日、別の学校、区内の小学校に訪問したときも、プログラミングの授業の様子を見学させていただきました。そのときにお子さんが、見ず知らずの私に向かって一生懸命、自分の作品を説明してくれて、とても楽しく学んでいるんだろうなと思ったところです。

また、ICTの活用は、教師、先生方の創意工夫を促すことができると思います。ICT活用については確立した指導方法がなく、また、技術もどんどん進化しておりますので、意欲のある先生方が創意工夫できる部分が大いのではないかなと思います。

今回、学校の休校、自宅学習という事態となって、どの学校でもICTを活用せざるを得ない状況となり、先ほどの事例発表のような意欲的に御活用いただいている事例も多いわけですが、これまでなかなか進まなかったICTの環境の整備、活用が、今回、区長の御英断もあり、一気に進むことになったと思います。よく言われますように、ピンチをチャンスということで、ICT活用による学習の充実を一層深めるチャンスにしたいと思っております。

この点、国の方針としても、これからはICTの活用は当然のこととして、オンライン教育も進めながら、同時に、やはりこれまでの対面指導も重要であり、その組合せが必要

とされています。さらに言えば、全国学力テストについても、コンピューター上、パソコン上で実施することも、今、国のほうでは検討されています。こうした国の方針を踏まえつつ、世田谷として先進的な取組を進めたいと考えているところ、ICT活用のメリットとして、私は3点あると思います。

1点目は、前回の経産省の浅野さんのお話にもありましたように、個別最適化と言われるように、1人のお子さんに応じた学びができるということがとても大きいと思います。つまり、例えば障害があるとかないとか、あるいは理解度に関わらず、その1人に応じた学びの内容、方法で学ぶことができる。誰も取り残さない、しかも楽しく学べるということとはとても大きいと思います。

また、先ほどの事例発表にありましたように、共有できるということも大きいと思います。学びのプロセスや成果をお子さん同士、お子さんと先生、さらには保護者の方とも共有できるメリットがあると思います。

3点目は、場所を問わないということです。区内の学校でも、学校に来られないお子さんの自宅と教室をつないで、授業の様子を自宅でも同時に見ることができるような取組が既に行われています。1人1台となった段階では、タブレットを自宅にも持ち帰ることができるようにすることも視野に検討を進めていますので、例えば不登校のお子さんであっても、授業を受けようと思えば自宅で受けられるようにできたらいいなと思っています。

最後に、御提案となりますけれども、本日の会議は、区長のお話にもありましたように、法律上の会議でありまして、教育を行うための諸条件の整備について協議するという会議となっています。そして、本日、区の行政についての最終決定権者の方々がお集まりですので、そこで、ぜひ来年度から全校でICTを活用した授業を自宅でも受けることを可能とするよう、環境の整備も含めて区としての方針を決めていただくのはどうかと思います。

というのは、先日、教育長と区内の保護者の方々や区民の方々とオンラインミーティングに私も参加というか伺っておりました。そうした保護者や区民の方々のお話をいただけるというのはとてもありがたいなと思って伺っていたところ、その中で出てきたのが、本日の事例の御発表のような取組ができている学校はいいんだけど、うちの学校はいつ可能になるんですかというお話が幾つか御意見としてあり、最後のほうで、たしか代表の方が、これをいつまでに実行するかという期限を決めてほしいというようなお話があったように思っています。私はおっしゃるとおりだなと思っていまして、どの学校でも同じ

ように学べる機会を提供することが行政の役割ではないかなと思います。

先ほど区長からも、教育の土台づくりが区の役割という大変ありがたいお話もありましたので、例えば遅くとも来年度の初めから、どの学校でもICTを活用した授業を自宅でも受けられるようにする。そのための必要な措置、予算も含めて、今年度中に準備をする、そうしたことを方針としてお決めいただければどうかなという御提案をしたいと思います。

○司会 ありがとうございます。今、御提案もいただきましたので、また区長のほうから発言の機会に触れていただければと思っております。

続きまして、宮田委員へもお伺いいたします。元区立小中学校のPTA会長で、また、世田谷区立小学校PTA連合協議会会長の経験もある宮田委員ですが、ICTの活用によって、これからの世田谷の教育はどうあるべきか、同様にお伺いいたします。

○宮田委員 宮田でございます。

今回の長期学校休業ということで、夏季休暇や冬休みなど子どもと長い時間、保護者がいるということではございましたが、今回のような経験は今までにないことでございます。

家庭で一番心配されたのは、子どもの学びが止まってしまうこと、学習をどうしよう、それから学校とのつながりがなくなった時点で、保護者も子どもも不安な状況というものがある御家庭もございました。私も保護者の1人ですが、家庭での教育のあり方、また保護者の子どもとの関わり方ということを改めて考える機会となりました。

私には大学生の子どもがおりまして、オンライン授業を1学期から行っております。最初はネット環境の不調とか、画像が止まったり、レポートと課題の多さなど苦労していましたが、慣れてくると、録画されている授業は、自分の分からない箇所を後から何回もチェックできたり、自分の都合のいい時間に画像が確認できるので、楽しく学んでいたようです。授業によってはプレゼン、グループディスカッションもあり、オンラインでも通常の授業と全く一緒ということにはいかないと思いますが、新しい授業の形の一つだと思いました。大学では、リモート授業のほかに、後から録画での学びができたり、あと双方のやりとりも取り入れたりということがございましたので、その点もまた新しい学び方だと思いました。

小学校の低学年ですと、1時間、授業を画像で見るということはかなり厳しいとは思いますが、短い時間で、先生、同じクラスの子どもたちと過ごせるといった、朝の会とかをやられている学校もありましたが、つながりを感じ、安心すると聞いておりました。

ICTの活用ということで、生活様式が変わり、新しい教育が取り入れられていく中で、子どもたち一人一人が自分らしく過ごすことができているか、また何を感じ、何を不安に思っているのか、子どもたちの内面も含め学校や保護者が注意深く見守り、子どもと向き合っていくことが大切だとも感じました。

やはりICTの活用によって、自分の苦手なところを自分のペースでじっくりと学ぶことができる、また興味のあることは深く学ぶこともできるといった個々に合った学びの中で自分の目標もでき、主体的に学ぶ姿勢ができるということは大きなメリットだと思っております。

また、これはお願いになりますが、ICTの活用について、内容や進め方、学校の教育方針に合わせて保護者へ連携していただけると、そういった機器とかに、私は弱いほうですが、あまり詳しくない保護者もいらっしゃいますので、共有できると、さらに家庭学習での進め方が分かりやすくなると思います。

最後になりますが、先ほど桜丘中学校のプレゼンを見させていただきまして、本当に工夫されていると思いました。生徒側のことを意識した映像をつくっていらっしゃるのと、あと実体験の中から学ぶことが大切だということは、私も全くそうだと思っております。ICTと、あと今までのように他者と関わりながらの教育というものと併せて、世田谷区でも新しい教育を目指していただければと思います。やはりこの世田谷区が目指している誰一人置き去りにしない教育の推進を大切にさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。保護者との連携などのそういったお願いなども伺いました。

それでは次に、中村委員へも同様にお伺いします。学校長としての経験もあり、教育の現場経験の長い中村委員ですが、ICTの活用によって、これからの世田谷の教育はどうあるべきか、特に教員のICT能力の向上についてお伺いします。

○中村委員 中村です。区内中学校で3校の校長を務めさせていただきました。

ICT活用ということですが、当然、教える側のスキルアップは欠かせないと思います。文部科学省は、教員のICT活用指導力チェックリストというのを提示しています。そこには5つの大項目がありますが、今回のことで特に早急に求められるのが、教材研究・指導の準備・評価・校務などにICTを活用する能力、それから、授業中にICTを活用して指導する能力の2つだと思います。

では、具体的にどうしたらいいのか。私は、とりあえず急いで先生たちに学んでいただきたいのは4つあります。1つは、やはりオンラインミーティングシステムのスキル、双方向の授業のために、ぜひこれを学んでいただきたい。それから、もう今では若い人は当たり前ですが、パワーポイントのスキルです。それから、区のほうでも用意いただいたロイノートなどの課題のやりとりのスキル、それから動画配信のスキルの4つです。

今でも学校の先生の中には、黒板とチョークで授業する方はまだまだいらっしゃいます。有名予備校のカリスマ講師の方でもそうです。でも、そんな方々の職人芸を生かす意味でも取り組みやすいのがオンラインミーティングシステムです。日曜朝の某ニュース番組のように、あらかじめ板書したものを映しながら説明、授業を行えばいいわけです。黒板の代わりに、パワポで作成したスライドを活用すれば、さらに効果的になると思います。慣れてくれば、生徒とのやりとりや生徒同士の活動も可能になるでしょう。動画については、作成の時間がかかることや、内容によっては児童生徒が飽きて見ないなどの課題も指摘されていますが、やはり実技教科の手順の説明や理科の実験などでは大変効果的です。教科、目的によって、オンラインの授業と併用すれば、大変効果があると思います。

いずれにしても、各校任せでは、スキルの高い教員に負荷がかかります。ICT相談員のような非常勤スタッフを配置し、ヘルプデスクや校内研修の役割を担ってもらえば、教員のスキルアップにつながると思います。行政には、このあたりを御検討いただければ幸いです。

○司会 ありがとうございます。4つのスキルですとか、ICT相談員などの話もいただきました。

続きまして、澁澤委員へもお伺いします。澁澤委員は、過去に学生とともに限界集落での実地調査を行った経験などもあり、実体験に基づく教育、主体的な学びについて提唱されていますが、ICTの活用によって、これからの世田谷の教育がどうあるべきかお伺いいたします。

○澁澤委員 過去にではなく現在も、私の活動のほとんどは地域に入って、その人々と一緒にどうやってその地域の未来をつくっていくかということが現実の仕事です。その中で、学生ですとか、いろいろな方々と一緒にその地域に入って物を考えるという活動を続けております。

その中で、聞き書き甲子園という活動がちょうど今年20年になります。全国の100人の高校生を公募で募集して、100人の山ですとか川ですとか海で生きてきた、自然の中で生きて

きたおじいちゃん、おばあちゃんたちの人生の聞き書きをするという活動です。

この活動は、今年中止になりました。なぜそれが中止になったのか。一方、その聞き書きを来年度どう進めるか、あるいは今年度、この聞き書きが中止になっている間、どうやって学生たちをフォローしていくかという会議は、むしろ頻繁に開かれるようになりました。それはまさにオンラインでやる会議だからです。

何を言いたいかという、私たちが会議という形で言語化されたもの、それを自分たちが苦心をしながら判断をしていくということは、オンライン、あるいはこのICTの活用で非常に早く、また非常に緻密になっていきます。また、それぞれの人々に合わせた形での理解を進めていくということも可能になっていきますので、むしろ会議の進行に関しては、このICTはとても有意義だと思います。

ところが、さっきの地域のフィールドワークのように、地域で暮らした人たちが一体どういう自然環境の中で、どういう表情をして、どういう土の匂いの中で、どうやって生きてきたかということ、つまり五感でその情報を得て、自分の中で解釈して、判断をしていくということは、実はICTではどうしてもできないということに気づいたわけです。教育も、やっぱりその両方のバランスなんだというふうに私は思っています。

例えば、今、私の家の近くにある砧公園を歩くと、ヤマユリの花、あるいはオシロイバナの花なんか咲いています。これからもうしばらくすると、キンモクセイの花が満開になってきます。それぞれの花の匂いは、ここにいらっしゃる皆さんも何となくお分かりだと思んですが、それを言葉で表現しろという、私たちはそれを表現する言葉はなかなか見つかりません。つまり、私たちが言葉以前の段階で、五感で感じている知識というのは、実は膨大なものがあります。

私ども世田谷区が幼児教育で特に取り上げている非認知能力、非常に難しい言葉を使いますが、一般的な使い方という、例えば情緒を出すとか、かつての日本人は「もののはれ」とか言ってきました。そういう言葉にならない私たちが認識している部分、その部分をこれから生徒たちにどうやって伝えていくのか。コロナでいろんな形で制約を受けるようになってきます。ですけれども、私たちは頭と体と両方持っていますので、体でどう五感で感じて、そして頭という知識の中で判断をしていくかというそのバランスを、子どもたちを育てるときにとっても重要な視点として持たなきゃいけないということを逆にこのICT化、あるいはコロナという形で私たちは突きつけられたのかなというふうに思っています。

これからICTがどんどん進んでいって、いろいろな形で学校現場に入ってくる、これはもう大前提だと思いますし、前の浅野さんのお話の中では、鉛筆と同じですというお話をされていました。ノートと一緒にです。まさにノートと一緒にような使い方をこれからされていくんだと思います。その鉛筆とノートで伝えられないものをどう伝えていくか。

実は私たちの今回のコロナの多くの人々の行動パターンを見ても、実はその認識の部分で行動パターンを決めているのではなくて、その情緒の部分で行動パターンを決めていらっしゃる方が圧倒的に多いということがお分かりいただけだと思います。私たちはみんな高等教育を受けてきています。少なくとも義務教育は全員受けています。コロナウイルスというのがどういうものかということの基礎知識を持てば、どういう行動するかというのは、もうおのずから、何も政府やあるいは行政が規制をしなくてもできるはずなのに、実は私たちは判断しているのは、その文字の部分ではなくて情緒の部分で自分の行動パターンを決めているということです。この情緒と認識とどうバランスをさせるか、逆にそれが、繰り返しになりますが、今、私たちの教育現場に突きつけられている課題なのかなというふうに思っています。

○司会 ありがとうございます。今ありましたように、情緒と認識のバランス、非常に大切な視点をお話いただきました。

続きまして、教育長のほうにお伺いします。今、教育委員の皆さんからいろいろとお話をいただきましたが、教育委員会として、将来の世田谷の教育のあるべき姿について、どのような展望を持ち、教育改革を進めていくとお考えでしょうかお伺いいたします。

○渡部教育長 今回、このような休校ということになり、改めて学校の役割が再認識されました。私からは大きく4つ挙げさせていただきます。

まず1点目ですが、学校が子どもの学びのステーションの役割であるということ、2つ目に、対面でもオンラインでも協働的に学ぶことが大切であるということ、この2点は大体同じなんです、このコロナ禍の中で1人で学ぶということの難しさが大変感じられました。一方通行の学びでは、広がりや深まりが見られません。やはりどんなときでも協働的に学ぶということが大切であるということが改めて感じさせられました。

そして3つ目ですが、教える、教わるという関係ではない関係の大切さです。今回の動画づくりやオンラインの学習では、桜丘の先生たちからも前にお話がありましたから、子どもから学ぶことが多かった。私もZoomとか、そういう動画の対面式のが苦手だったりするんですが、やはり子どものほうがすごく得意で、こうやるんだよと教えてくれたり

しました。教える、教えられるだけではない、そういう学び方も大事にしていくべきだなというふうに思っています。

それから、外部の方からもたくさんの学びがありました。今までは閉じられた学校という中でしか学びはなかったわけですが、今回はたくさんの外部の方からも支援していただいて、一方通行ではない多様な学びの重要性が再認識されたというふうに感じています。

4つ目です。子どもの安全安心という重要な役割があるということです。子どもたちに会えないということがとても心配で、子どもの心身の安全がとても案じられました。日頃、毎日学校に行っていると感じないことかもしれないんですが、子どもの安全を守るという重要な役割を学校が担っているんだということが再認識されました。

このような中で、保護者の皆様から、先ほど区長からもありましたが、オンラインを望む声をいただきました。子どもたちはつながることを望んだということですね。もう心から先生や友達からの連絡を待っていました。私たちは子どもに孤独感を感じさせないようにするということが本当に一番重要だというふうに今は思っています。あなたは1人ではないということを子どもに分からせるということが、教育の中では非常に重要な部分を占めているんだなというふうに思っています。

このように学校の役割が再認識された今、私たちは意識を変えるということが重要だと思っています。教師の対面指導はもちろん重要です。先ほど澁澤委員のほうから、五感を使った学びというふうにありました。私たちは、やっぱり言葉にできないものという学びが学校の中でも、子どもとのつながりの中でもあります。そういう対面の指導も、これからもずっと大事にしていこうと思っています。

それと同時に、オンラインの学習です。先ほどよさというところで述べさせていただきましたが、そういうふうに両方を組み合わせて、子どもたちの探究的な学習を展開することがこれから重要になっていくんだなというふうに感じています。

○司会 ありがとうございます。

ここまでのところで、「ICTの活用によってこれからの世田谷の教育はどうあるべきか」の議論を進めてまいりました。

次に、2つ目のテーマに話を進めさせていただきます。「withコロナ、afterコロナの時代における教育や社会のあり方について」です。

まず、区長にお伺いします。先ほど教育委員会事務局からの説明であったとおり、教育委員会では、休業期間中の学びの機会を補填するため、ICTを活用した学習支援に取り

組みました。これはwithコロナ、afterコロナと言われる新たな社会環境に対応するための取組になります。しかし、昨年度のこの会議でも、ICTへの期待がある一方で、ICTはあくまでもツールにすぎず、効率的、効果的な活用することで初めて子どもたちの学びに対する興味を引き出し、個別最適化された学習環境がもたらされると議論してきました。そうした議論を踏まえ、予算の編成、執行の権限を持つ区長として、早急な環境整備に取り組む教育委員会と今後どのように連携し、また、withコロナ、afterコロナ社会における自治体の長としての役割をどう捉えているかお伺いいたします。

○保坂区長 教育委員の皆さんからいろいろな御指摘をいただきました。

まず、亀田委員からのGIGAスクール、また新しい教育環境についての予算づけについて、もう既に判断をし、実行に移しています。ただ、これはパソコン、タブレットなりが手元にあればそれでいいということではなくて、今後、そこに附帯して、いろいろな費用だとか、今、中村委員のほうからも、パワーポイントとかロイロノートとか、いろいろ教員のスキルアップのお話も出てきましたけれども、やはりスタートラインだろうと。鉛筆とノート、黒板も含めて、これを使ってどうするのかと、これを使って何をどう展開するのかというときに、やはり予算的な基盤も必要となってくるんだと、それは十分配慮したいと思います。

そこで重要になってくるのは、中村委員のほうからあったお話ですが、やはり学校の先生方が様々なスキルアップをしていかなければいけない。ただ私は、やはり何事でもそうですけれども、人によって得意な領域は違うと思うんです。この方面はうんと得意けれども、対人関係は非常に難しい方とか、いろいろいると思うんですね。なので、世田谷区でこれだけ多い学校、4万8000人の児童生徒を教えている先生方の中で、そういったことが得意な方の才能を皆さんで共有するような仕組みというのを考えてはどうだろうかというふうに思っています。

そのためには、新しい教育センター、教育総合センターが間もなく建設されていくということなんですね。今ある教育センターの単なる引越しではなくて、そこにヘルプデスクというお話があったんですが、もちろんそういった相談に応じていく体制は必要なんです。もう少し戦略的に、世界中で学びの大変革が起きています。つまり、ロックダウンした国も多いし、ネット配信で授業を組み立てているというのも世界各国やってという中で、教材の進化もかなりスピードが上がっているはずなんですね。日本は、ある意味では一時代前は世界のトップをいろんところで切って、牽引していましたが、どうもデジタルの

分野では、相当、トップグループにいるとは言えない現状がございますよね。アジアの各国でも、もっと積極的に活用している国もあります。

そのように考えていくと、やはり世界中で起こっている教材や学びの変化に敏感にアンテナを立てながら、そして日本国内、あるいは世田谷区内の優れた授業の実践や展開、そういうことをしっかりキャッチして、次にこう展開したらいいよというふうに助言ができるような、そういう専門的なチーム、そのチームの長というのが必要だろうというふうに思っております。必ずしも学校の先生出身ではない、むしろ民間のそれぞれの企業や教材開発などをしてきた中で、優れた人もいるだろうというふうに思っています。

それから新教育センターの中で、まさに1人1台持つということも鉛筆とノートと捉えて、その中身をどうするのかというところを支えていく役割が区にはあるんだろうというふうに思っております。

また、もう一つ、お話の中で、宮田委員のほうから実体験とのつながりも大事だというお話がございました。その後、澁澤委員のお話になった五感で体得するとか、身体的に獲得する学び、これは単なる知識として頭の中に入れてきて記憶されるというものはるかに超えて、体に刻むという人間の古代からの学びがあったはずで、そのことがどれだけ意味があるのかということが今見直されてきている。したがって、遊びだとか、様々な体を使って子どもたちが友達とチームをつくりながら、失敗したり、けんかしたりしながらつくり上げてくる、あるいは駆け回ったり、冒険をしたりする。そういう中で形成されてくる意欲とか、心や人格的な基盤といいましょうか、そういうものがICTの中で全部保障できるかという、これはかなり難しいものがあるんじゃないだろうかということが澁澤委員の御指摘だったと思います。

ですから、そう考えていくと、ICTでやれることと、ICTの世界を通して現実のすばらしさ、リアルな世界で子どもたちが、例えばその授業を通して、次の日に道端で咲いている花を見て、全然違う感じ方をする。こういうICTのデジタルの世界からリアルの世界にもう1回引っ張り込んでいくという、そういうメカニズムをぜひ世田谷のICT教育では考えてもらえたらということを期待いたします。

○司会 ありがとうございます。

また引き続き、教育委員の皆さんにもお伺いしたいと思います。

まず、中村委員へお伺いいたします。withコロナ、afterコロナという新たな時代の教育と社会のあり方について、委員はどのようなふうに捉えてお考えでございましょうか。お伺

いします。

○中村委員 コロナ後を見据えた新しい学びの形として、中教審が年内に答申を出すという報道がありました。その中で、コロナ収束後に向けて遠隔教育を積極的に取り組むことで、子どもたちを誰1人取り残すことのない個別最適化した学びと社会とつながる協働的、探求的な学びを実現していく方向性を打ち出しました。つまり、ポストコロナにおける新しい学びとして、教員が対面指導と家庭や地域社会と連携した遠隔オンライン教育等を使いこなすハイブリット型の協働的な学びを行っていくという新たな任務が加わりました。報道の中には、ICT支援員やGIGAスクールサポーターなどの配置ということも触れられていましたけれども、それだけで大丈夫でしょうか。

私は在任中、全日本中学校長会の仕事で、教員の働き方改革として、学校の業務仕分けを検討し、文科省に提言しました。しかし、今回のコロナで、この働き方改革はちょっとかすんでしまったような気がします。

文科省が6月に出した「学びの保障」総合対策パッケージの中に、教師が学びの保障に集中する環境整備等もありました。ぜひ推進していただけたらと思います。

やはりコロナを機に学校のほうも、もう一度、学校がやるべきことの精査が必要だと思います。3密回避となると、学校行事のあり方も見直す必要があります。

先ほど個別最適化というキーワードがありました。学校は授業以外にも、教師と児童生徒、児童生徒同士の関わりから学ぶ場面も多いです。従来の学校は、そこを大切にしてきました。しかし、最近はそれが苦手という子どもも増えています。そのような学校に来づらい生徒にオンラインなどでつながる選択肢を増やす契機にもするべきだと思います。それにより、多様性を認め合う新たな学校教育につながるとよいと思います。

そして、教員にも意識改革が必要です。今回の危機で、多くの学校の教員が児童生徒のために頑張りました。日本の教員のポテンシャルは高いと思います。しかし、今は変わり目なのだということを強く認識して、今までの指導法や学校の常識を見直して、積極的に改革を進めてほしいと思います。

慶應義塾大学の中室先生が、ある対談記事で作家のダニエル・ピンクの言葉を引用していました。人の意欲を高めるのは裁量の高さ、自分自身の成長、目標の3つであるということです。教員には、目標というものは皆さん多くの方がお持ちです。それなら、教員の意欲を高めるには、個人の裁量を高めること、成長できるような機会を提供することが重要だと言われていました。行政当局には、このあたりも御考慮いただければ幸いです。よ

ろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

引き続き、宮田委員のほうにもお伺いします。同じテーマとなりますが、「withコロナ、afterコロナの時代における教育や社会のあり方について」お考えをお伺いできればと思います。

○宮田委員 オンライン教育やICT活用ということで、いつでも、どこでも、誰もが学んだり、また逆に教えたりできるということになると思います。児童生徒によっては、最初の質問でも答えさせていただいていますが、習熟度に差が出やすい授業、単元においては、中村委員もおっしゃっていましたが習熟度別の遠隔授業、また、遠隔授業の中でも、例えばオンラインですと、国内だけではなく海外の児童生徒とも交流することができます。そういった色々な国や地域の文化に触れる機会も増えますので、国際感覚や社会性も育まれると思いますので、先程の実体験とは別に、そういったことでの活用を今後も期待しております。

○司会 ありがとうございます。引き続き、亀田委員のほうにも同じテーマでお伺いしたいと思います。

○亀田委員 まず、区長から、ICTについてはこれからがスタートであって、教育環境の整備に配慮していきたいというお話がありまして、感謝したいと思います。どうもありがとうございます。コンテンツや支援体制については、教育委員会としてもしっかり検討してまいりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

今回の感染拡大という事態のインパクトを考えたときに、社会全体として見れば、社会経済がデジタルシフト、デジタル化していくというのが一番大きなインパクトだと考えます。また、それだけでなく、もともと少子高齢化もあって経済成長率が低下傾向にあったところ、コロナによって経済が縮小し、この縮小傾向はしばらく続くと予想されています。そうした中で、個人として、社会としてどう進んでいくかということが、これからの社会の大きな課題であろうと考えています。

私からは、社会における世田谷の教育の方向性として、これまでの教育の成果や先生たちの御努力を尊重しながら、3点申し上げたいと思います。

1つは、ばらばらの方向に伸ばす、伸びていく社会であり教育ということと考えています。社会にしても個人としても、これから10年後であってもなかなか将来を見通すことが難しい現状では、何が正解かということは誰にも分からないと思います。ということは、

それぞれがそれぞれなりにチャレンジをして、ひょっとしたらうまくいくかもしれないけれども、うまくいかないかもしれない。そうした中で、1つの決められた方向ではなく、みんながそれぞれ多様な方向に伸びていく、伸ばしていくということが大事だろうと考えます。

そうすると、学校段階では多様性の尊重という言葉になるわけですがけれども、私は多様性の尊重というのは少数であることを重視するということと考えます。大勢の意見とは異なる意見を言うほうがむしろ格好いい。「同じです」と言うだけでなく、正解でないかもしれないけれども、「同じじゃありません」と言えるということが格好いいという授業を、ぜひ先生たちにはしていただきたいと思ひますし、教育委員会としても、そういう方向性を示していきたいと思ひています。

2つ目は、既存の枠を取り払うということです。社会では、働き方も、今、大きく変わろうとしています。先ほどチャレンジと申し上げましたように、日本の社会の状況からすると、前例踏襲、あるいは現状維持というスタンスですと、実は現状維持できずに、結果としては衰退に向かってしまいかねないと思ひます。したがって、現状維持ではなくて、常に変えると、それは正解かどうかというよりも、むしろ変えることを優先すべきと、優先したほうがいいんじゃないかなと私は思ひています。これは学校だけでなく行政についても同じなのですけれども、去年と同じというのは、結果として質の低下を招くと思ひて、質の維持向上のためには常に改善していくということが重要ではないかと思ひます。

先ほど中村委員も、学校においても新しい発想でということで、様々なルールの見直しというお話もありましたように、ルールの見直し、新しい授業のスタイルにチャレンジしていくということをぜひ先生方にはお願いしたいと思ひています。それは、これまでのルールに縛られずに、改めて子どもの視点に立って考えてみると、どう変えていくかということがおのずから見えてくるのではないかなと思ひています。

最後は、社会で言えば経営力、学校段階では自分で決める力が求められるようになると考えます。今回のコロナの事態のように、新たな課題が生じたとき、既存のやり方では対応できないために、社会的な資源を必要とところに振り向けていく必要があると思ひます。一方で、資源は有限ですので、どこかに振り向けるには、どこかを削らないといけなない。その決断、状況を判断して、優先度とタイミングに応じた決断、さらにはその決断の正当性を理解してもらうためのコミュニケーションが社会全体では求められていると思ひます。そうした力を培うために、学校段階では自分で決める、人と同じだからそうするので

なくて自分で決める力、事実を把握して、多角的な分析をして、根拠をもって決める、そうした力を養うことが必要だと思います。それは恐らくキャリア教育の一環ではないかなと思っています。これについても、お子さんたちにそれを求める以上、学校においても決める力、すなわち、どこかを削ったり、前例を変える勇気を持って決める必要があると思いますし、さらに、それは行政でも同じだと思います。

言うのは簡単なんですけれども、実際には難しいことも多いとは思いますが、私としては、そうした世田谷の教育にしていきたいと思っています。

○司会 ありがとうございます。

引き続き、澁澤委員へも同じテーマで質問したいと思います。

○澁澤委員 実は私は、もう20年近く前からになるんですが、ある大学で講師をやっている、週1回、2こまの授業、講義を持っています。

御存じのとおり、今、大学は全国、ほとんどがオンライン授業になりました。オンライン授業になるときに、教員たちはみんな大騒ぎだったわけです。ほとんどの教員がスキルを持っていませんでしたから、一体どうやるんだというどたばた騒ぎから、ほとんどの教員が自分たちはユーチューバーにならなきゃいけないんだと思ったんですよ。何とか学生たちがちゃんと見てくれる授業をオンラインで流していかないと、これは大学の教員として能力がないんだというふうに、みんな思ったんです。ところが、オンラインでやってみて、全然違うということが逆に分かってきました。

私の例で言いますと、私のクラスは250人ぐらい学生がいます。そうすると、250人いると、今までは、そのうちの授業を一生懸命聞いているのは大体150人ぐらいのもので、あと100人は聞いたり聞かなかったりという後ろのほうに座っている連中たちなんです。そうすると、250人いるとその150人に大体絞って、顔色を見ながら講義を進めていく。その中で熱心な反応があるのは、その150人のうちのまた80人ぐらいで、リアクションがあるのは、そのうちのまた40人ぐらい。そのぐらいの中で進んでいけば、授業というのは成果があったなと今まで20年近く思ってきたんです。

ところが、オンラインにした瞬間に、250人が250人反応してくるんです。しかも、その1こまの僅か90分、当然、オンラインですから少し短めにして70分とか60分でやっているんですが、その間で、学生たちが理解できる場所と理解できるスピードが全員250人違うということが分かったんです。しかも、チャットでオンラインで返してくる子、それから授業の後、終わった後にメールで来る子、それからアンケートに書き込んでくる子、反応の

仕方も全部様々。ということは、教員がその僅か90分なり何分の中に、一人一人の生徒に、一人一人の理解度に合わせて適切な情報を与えていかなきゃいけない。つまり、単なる画一の情報を与えるのが教員ではなくて、今までも、多分、小学校や中学校の先生方は、1クラスの中で絶えずそれをずっとやられているんだと思うんですが、より一層、ICT化が進んでくると、一人一人のオンタイムの反応にどう教員がリアクションをしていくか。つまり、一人一人全員に教員が寄り添っていく、そして寄り添って理解を一緒にしていく、まさに教えるのではなくて、一緒に理解を深めていくということを求められる。つまり、今まで私の経験したことの全く違う教員のスキル、それはICTのスキルよりも、一人一人の人間に寄り添うスキル、しかもそれを瞬時に何十人とやるというスキルというのは全然違うスキルなんだということを私はいま実感をしています。それは、今、本当に面白いと思います。こんな面白いことがあったのか、講義を持たせてもらって本当によかったなと思っているぐらいです。

多分、これからの世田谷の先生方も、もうやられている方もそうですし、これからICTにいろんな形でトライをしていかれようとしている方々も、教育の質というものが、教員と生徒の関係というのが根本的に多分変わっていくぐらい変わるんだろうなと思っていますし、それを一緒に教育委員会と教育の現場、それは先生と生徒と一緒にあって、保護者も含めて、また地域の方々にも多分お手伝いをいただかなきゃいけないと思いますので、そんな形で、新しい形をこれからまさにスタートラインに立ったところでつくっていただければ、ちょうどコロナも災いだけじゃなくて私どもにプラスを残してくれるのかなというふうに思っています。

○司会 ありがとうございます。

委員の皆さんからいろいろとお話を伺いましたけれども、教育長のほうにお伺いしたいと思いますが、教育委員会として、withコロナ、afterコロナの時代における将来の世田谷の教育のあるべき姿について、どのような展望を持ち、教育改革を進めていくお考えかお伺いいたします。

○渡部教育長 今回の分散登校やオンライン授業の中で、学校へ通うのが得意でない子どもたち、様々な事情で学校へ行けない子どもたちが出てきてくれたということが大変喜びでした。

先ほどの桜丘の先生たちも、不登校の子どもの話がお2人ともありました。その話の中で、その子の都合に合わせてできる、その子の調子に合わせてできるというふうに言って

くれたことが、私はとてもいいことだなというふうに思いました。生徒の視点に立って、先生方が考えてくれているということです。このような学びが実現すれば、様々な可能性が広がると思います。障害のある子どもたちの助けになったり、不登校の子どもたちの学びを保障することになるというふうに考えました。

これから、先ほど申し上げたことで繰り返しになりますが、やはり対面指導とオンライン学習の2つを組み合わせるという意識改革が必要だと思います。それは教員もそうだし、子どももそうであるし、保護者もそうです。地域の方もそういうふうに学びが変わってきたということを理解していただく必要があるかなというふうに思いました。

先ほど区長の話にもありましたが、デジタルとリアルというのを組み合わせていくというところで考えていくと、先ほど太田先生の話の中で「シダの葉」というのがありました。あれを見ると、私たちもシダの葉を探してみようかなという気持ちに多分なつたと思うんですね。だから、あのシダを学校に持ってきてくれて、先生、これがあったよというのが教育の狙いじゃないかなというふうに感じました。

それから、ICTの利点を少し整理しておきたいと思います。簡単にですが、4つです。

いつでも、どこでも、誰でも学んだり教えたりすることができるというところで、子どもの立場で考えてみると、宿題が変わってくると思うんですね。基礎学力を養うドリルというのは、いつでもできるというふうになってきます。だから、宿題として、いつまでにやってきなさいというのではなくて、漢字とか計算とか、そういう練習は、いつでも、どこでも子どもの都合に合わせてできるようになるということです。

2つ目が、地理的制約や時間的制約を超えた質の高い学びができるというところで、これは先ほど宮田委員がおっしゃっていたように、質の高い学びを得ることはできるはずで、いろいろな地域とつながることもできるし、それから、外国ともつながることができるということです。それからビッグデータの活用や分析により授業改善ができるというところで、よい動画はみんなで共有をしようというふうに世田谷区でも考えています。今回の動画はたくさんいいのがありました。それは今、井元統括が集めてくれているので、そういうふうによくできた動画はこれからみんなでどんどん活用していくということです。

それから、データの連携によって義務教育から大学までも、こういうことを子どもたちが学んできたということを連携していくこともできるということです。これは考えていくと、働き方改革につながっていくと思うんですね。だから、私たちが使いこなすようになれば、働き方改革、中村委員が教員のことについてお話をさせていただきましたが、そこに

もつながっていくんだなというところですよ。私たちが使いこなせば、利点はとてもあるというふうに考えています。もちろん留意点はたくさんあると思います。ICTの支援員を導入したり、スクール・サポート・スタッフを入れたりとか、それから、家庭でも、なかなか技術的に難しいという家庭もあるということも分かったので、そういうサポート体制も必要だと、先ほど宮田委員のお話からありました。

それから、学びのことに關しては、大変可能性があつて、よく最近、反転学習ということをおかれておいて、宿題と学校の学びが逆になるというんですね。まず先生がつくつた映像を子どもが見ておいて、予習をしておく。そして、それについて子どもたちが協議するのを学校でやる。または、その学びで足りないところを個別に先生に教えてもらうとか、宿題のようなことを学校でやるように変わってくるということなんですよ。これもかなり可能性がある学習だというふうに思っています。こういうふうに、今までであることではない新しい考え方に教育を変えていくということが必要だというふうに考えています。

先ほどの亀田委員がたくさんの視点を言っておいていただきましたが、現状維持は後退ということで、キャリア教育の視点でこれから世田谷の教育をこのような視点で変えていければいいなというふうに考えています。

○司会 ありがとうございます。

まだまだいろいろとお伺いしたいところではございますが、そろそろお時間が迫つてまいりましたので、意見交換のまとめに入りたいと思います。

最後に、本日の議論で、区長と教育委員会が共有しました内容を総括していただきながら、区長のほうに、区長の立場から世田谷区の教育について、今後の方向性やあり方等についてお考えをお伺いします。

○保坂区長 教室で対面する一斉授業と、ICTを通して家庭で先生と生徒がつながって学ぶ学び方は大分違うんだということは改めて語られたと思います。

個別最適化というキーワードが昨年の経産省の浅野さんからも出ていますが、このICT教育の中で一斉授業ではできなかったことが様々できる。とりわけ特別支援教育においては、学びのつまずきや発達の課題がある子どもたちが一人一人違うわけですよ。同じように、つまずいてはいないわけで、ある子は識字的な言語能力が特別高い子、けれども、ある一定のことが不得意であるという子もいれば、不得意なところは全然それぞれ違うのに、これまでの特別支援教育では、どこかで共通のところを見つけて、時間を過ごす

と、授業をすると。一人一人に即したということで工夫されていると思いますが、今回、ICTになったときに、この障害のある子どもたちについては、特別一人一人に即したという意味での効果がちゃんと実証できるような教育が可能になる、そのように感じました。

中村委員のほうから、先生方がさらに、いろいろな意味で高いスキルを要望されるというお話がありましたけれども、先生であるとともに1人の生活者であり、親であり、市民であり、区民であるということはとても大事だと思うんですね。先生方はあまりにも忙し過ぎて、市民的な生活とか文化的な様々な出会いとか学び、この余裕がないんだというようなお話をよく現場から聞きます。

私どもとしては、やはり学校の先生が様々な世の中の動向に目を凝らし、そして子どもたちにここがポイントだよねというふうに、小さい仲間として一緒に正解のない世界を見開いていくような、そういう新しい授業をぜひできるような基盤を整えたい。しかし、それはやはり新教育センターにかなり求められるだろうと思いますので、ICTの議論は今年も続けたいんですが、このあたりの新教育センターに求められる今日のテーマ、そこをもう少し今後深掘りをしていきたいと思います。

宮田さんからは、国際交流の可能性もあるじゃないかというお話をいただきました。実は中村先生と7年ぐらい前にオランダに教育視察に行ったことがございます。大変進んでいました。スマートボードという電子黒板も当たり前前に配備されていましたが、もちろんパワーポイントも当たり前のように使っていて、個別習熟度も一瞬のデータで我々に見せてくれる。ここで逆にあちらから投げ返されたのは、世田谷の子どもたちと大いに交流しようじゃないか、スカイプで交流しようよというような、課題というカリクエストをいただきました。

現にEUでは、当時、例えばオランダの中学生がスペインの中学生と共同で、例えば産業振興というようなテーマと一緒にディスカッションをして、授業を共有するんですね。国際交流のための時間じゃなくて、社会科の授業を一緒に進めて、お互いが意見を言い合うなんてことをやっていました。でも、それはその当時、やり始めたばかりだったということです。

日本には、実は今回、学校でICTが使えるようになった最大の大きな変化がありますよね。スカイプ、あるいはZoomやTeamsが使えるようになってきたんですね。ようになってきたからには、国際交流で飛行機に乗っていくことを今回中断していますけれども、それはアメリカとも、あるいはヨーロッパとも、あるいはアジアとも、それぞれ直

接、子どもたちがそれぞれのコロナで制約されている。しかし、インターネットや画像、テレビ会議システムでは話ができたといいことが、時差の問題も、家庭の時間、例えば夜の8時半とかという時間を想定しても可能ですから、そこはぜひ教育委員会のほうで頑張って実現をしていただきたいと思いますし、子どもたち同士のやりとりの中から、もし国際交流で、あなたの国、あなたの学校ではどうしていたのということをぜひ私も聞いてみたいですね。それぞれの国で相当工夫しているはずで、それぞれの国で、相当教材が、あるいは学び方が変わっているはずで。

同じように、グローバル化されている社会の中で、それぞれの国が交通を断絶するという特異な状況に入っていますけれども、やがてafterコロナの時代に、それぞれのこの期間中に子どもたちがやったことが、それぞれの国の力の違い、あるいはいろんな新しい技術が出てくるかどうかの基盤の違いになって現れてくると思いますので、世界でチャレンジされていることは、日本でも必ずできるんだということですね。逆に日本でチャレンジしていて、世界の国々になるほど面白いということでそれをやってくれるということも、もちろんあります。

最後に、このICTの中で、私たちはここは気をつけていきたいと思うんですが、デジタル化された世界に全てのものはないということですね。あくまで私たちは現実に生きているということ子どもたちにデジタルでどう伝えるのか。困っている人、本当に苦しい人、そして重い病にかかって闘病している人、様々な苦痛や人生の試練の中で、子ども自身の共感力とか想像力とか、社会的にみんなで力を合わせて助けようとか、この気象異変で、豪雨でみんな避難所に日本中多くのところでいらっしゃるときに、自分たち子どもは何ができるのかという社会性だとか、そういうシチズンシップ教育、あるいは身体性を回復してチームを、近くにはないけれども心は近くつながってやれる力ですか、これがICTの画面の外側にきちんと形成されるような世田谷の教育というのが推進できるよう、議論を進めていきたいと思います。

○司会 ありがとうございます。

お時間となりましたので、最後に、保坂区長より閉会の御挨拶を申し上げます。区長、よろしくお願ひします。

○保坂区長 ちょっと予定の時間をオーバーいたしました、大変いいお話ができたと思います。我々世田谷区の行政部門も、そしてまさに教育、そして子どもたちに対面している学校の先生方や教育委員会も手探りでスタートをし始めて、これからコロナの影響を受

けながらも、しっかり子どもたちの育ち、学びに向き合って共に歩んでいこうと。そのことを区としては最大限支えようということを皆さんと再確認して、さらにその先にどういう工夫と段取りが必要なのか、どういうマップ、行程表があり得るのかという話を新教育センターの設立を少し描きながら詰めてまいりたいと思います。今日はありがとうございました。御覧いただいた皆さん、ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。

以上をもちまして令和2年度第1回世田谷区総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。

午後4時15分閉会